

相談ネットワーク通信

No.73
2012.5.15(火)

子育て・教育なんでも相談ネットワーク 岡山県北區表町1-4-64上町ビル3F Tel・Fax. 086-226-0110

執念でしきとめた父の戦死の場所

『海に墓標を』書き上げて

日本国民救援会岡山県本部

事務局長 中元輝夫

死の淵からの生還。私をこの世に押し戻してくれたのは、父だった。

1902(昭和27)年4月15日早朝。小雨が降るその日、オートバイで横断歩道を渡りかけた。そこに、後から猛スピードで走ってきた乗用車が突っ込んできた。オートバイもろとも、十数メートル先に跳ね飛んだ。

救急車で病院に運び込まれ、腹部に出血多量でただちに手術。私はそのまま危篤状態に陥った。担当医師は妻に、「会わせ

たい方がいるなら」と覚悟を促した。

それから三日目の朝のことだった。私の枕元に戦闘帽をかぶつてずぶぬれの父が私の上に立ったような気がした。「お父さん」と声を出した。その生死の境、この世と

考えるようになった。

あのびっしり濡れた姿。なぜ父は、ずぶ濡れなのだろうか。

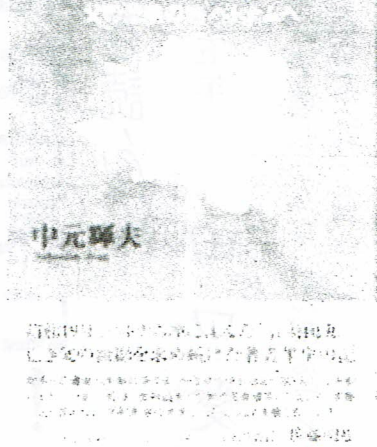
ふと、それが父の最期の様子を暗示しているように思えた。

もしかすると「海」？

私の父は「比島方面ニテ戦闘ニ於イテ戦死ス」の公報によつて戦死とされ、その後「遺骨」が届いた。その箱をあけたが、そこには父はいなかった。がらんとした白木の箱のすみっこに黒い炭のような物と石ころがあった。その時「これは父ではない。父は帰って

もあの世ともつかぬまどうみの中で、私は父と再会したのだ。枕元に現れた父の姿を思い返し、父が現れた意味を、私は病床の中で何度も

海に墓標を



文芸社 1365円

(3面につづく)

私の願い

戦争のない平和な世界に！

—『海に墓標を』を読んで—

岡山市 小学五年

田口 愛美^{まなみ}

私はこの本を読んで、愛する人の戦死の意味をさがしている人がまだ、たくさんいることを知りました。もしも私が日本が戦争しているところに生まれて、中元さんと同じようにお父さんを亡くしたり、ショックでなかなか立ち直れないと思います。それに中元さんは、お父さんの戦死の知らせからたった二年でお母さんを亡くしているのに、子どもだけで仕事をするのはすごいと思いました。

私はこの本の第一章で「白木の箱の中にいこつは入っていなかった」という文章を見てびびくりしました。それに

「比島方面ニテ死ス」と書いてあったのに本当はベトナムの海で戦死していたのには「どうして本当のことを書かないのだろう」と疑問がわいてきました。戦争で苦しめられた人をまだ苦しめるのかと思いました。

私は三年生の時に昔のくらしについて勉強しました。その時にゲストティーチャーの方が作ってくれた年表の「終戦」の文字を見て、その時はただ「戦争が終わったんだな」としか思ってたんですけどこの本を読んで改めて見ると、「戦争が終わってもすぐにくらしがよくなるわけでは

はないんだな」と思いました。

戦争でたくさん命を失ったからの終戦ではとてもおそいと思います。同じ人なのに、なぜ殺しあうのだろうかと思いました。中元さんのように愛する人を失った人はいっぱいいるのに、どうして戦争が長く続いたのか、とても不思議です。まだ戦争を読いている国はたくさんあるのでその国の戦争が終わってほしいです。

私はこの国がまた戦争を始めたらどうなるかを想像しました。大好きな家族や友達が死んでしまったら、悲しい気

持ちでいっぱいになると思います。でもそのショックから立ち直った中元さんはすごいです。今のとても楽しい生活をたくさん命の消えていく悲しい生活に変えてしまう戦争はぜったいに始まってほしくないです。

中元さんが66年間、いろいろなことが重なってお父さんの最後の場所にたどりついた時、私は、人と人のつながりの大切さを知りました。私はよく、友達とけんかをします。でも、けんかした後はおんながさみしい気持ちになるので、これからは友達とけんかをせず、友達を大切にしたいと思います。

私はこれから人とのつながりを大切にしていきたいと思います。そして、戦争のない、平和な世界になるように願います。

(たぐち まなみ)

(1面のつづき)

きていない」と思った。

それまで私は、フィリピン
のジャングルの中で戦った父
の姿を漠然と想像していた。
だが、それがそもそも違つて
いたのではないだろうか。「お
とつあん」は海で死んだの
ではないだろうか。

物言わぬ父の姿を思い出し
ながら生じた疑念は、何度も
思い返すうちに膨れ上がっ
た。それは、白木の遺骨箱を
開けた少年時代の鮮烈な体験
以来、私の中にくすぶり続け
た思いがたどり着いた根本的
な疑念だった。

「遺骨」と称して届けられ
た石ころと炭のかけら。障子
の外に革靴の足音を聞いて
は、父の帰還を夢見た思い
出。あるときは墓に語りかけ
て救いを求め、あるときはジ
ヤングルに生き続ける兵士の

姿を夢想し、思いが揺れ続け
た戦後。長い道のりを経て、
私は「現地での慰霊」を目標
に始めていた。

だが、そもそも「現地」と
はどこなのだろうか。

父を戦争に駆り出した国家
が家族に送りつけてきた戦死
公報は、「北島方面」だと言
う。だが、その戦死公報と一
緒に届いた「遺骨」の正体が
石ころと炭のかけらだったこ
とを思えば、その「死」を心
から受け入れることはできな
い。その地を探り当てなけれ
ば、現地で父を成仏させてや
ることもできない。

あの44(昭和19)年の秋に別
れた後、父はどこで戦い、ど
こで亡くなったのか。その疑
問を解くための長い探索が始
まった。

こうして、私の「海に墓標
を」の旅が始まったのであ
る。(なかもと てるお)

中元さんはすばらしい本
を出版されました。

あとがきにあるように
「ある日、なんの前触れも
なく、突如一枚の赤紙が
舞い込み、大黒柱であつ
た私の父は、戦場へと駆
り立てられました。病弱
だった母は亡くなり、兄
弟姉妹も引き裂かれ、幼
い子どもたちだけで、銃
後を守らねばなりません
でした。

私は、戦時下の父のこ
と、そして家族のことを
書き記すことで、当時の
農村に生きる市井の人々
の奥態を一つの歴史の記
憶として後世の人びとに
残しておきたい」との思い
でこの『海に墓標を』を完
成させられたのです。

私たちに二度と悲しい思いをさせないで!

多教になった現在、貴重な
記録の一つとして、多くの
人々に読まれ、語られてい
ってほしいものです。

小五の田口さんは、こ
の本を読んでの感想のな
かに「この国がまた戦争
をはじめたらどうなるの
かと想像しました。大好
きな家族や友だちが死ん
でしまったら悲しい気持
ちでいっぱいになると思
います。」「そして戦争の
ない平和な世界になるよ
う願います」と結んでい
ます。

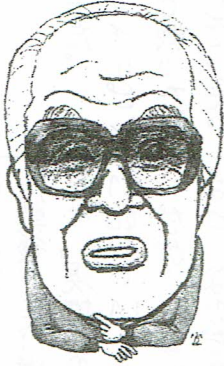
そうです。私たち大人
が田口さんたちの願いに
応えることができるよう
ほんとうの国づくりにつと
めなければ……。

この本はそのため大変
役立ちます。(難波一夫)



おかやま朝まるステーション 難波一夫さん出演

2010年11月25日(木)、26日(金) ⑥
(2日目の3)



—さあ、今日も先生がお持ちくださった、子どもたちの心がいっぱいになった資料の中から、一つ何かご披露いただけますか？

難波 はい。実は父の日に担任の先生がね、お父さんへ「みなさん、プレゼントのつもりで手紙を書いたらどうだろうか」という宿題を出されたんですね。担任の先生は、その手紙の中にきつと「お父さん「苦勞様」「お父さんありがとう」という返事が必ず

内容としてあるだろうと思っていたんですね。ところがその中に、「お父さんへ」：小学校3年生の子です：

「私のお父さんは、お母さんとよくけんがして、お母さんを怒鳴り、ぶちます。私が『やめて』というと、私もぶちます。そんでお母さんは、口を利かなくなってしまうんです。お母さんが口を利かないと家の中が真っ暗になります。それで、私たちも機嫌が悪くなってしまうんです。私が妹や弟をいじめると怒るのに、お父さんはお母さんをいじめます。私もできるだけいじめないから、お父さんもお母さんに怖いこ

とをしないでください」

こういうことを書いた子がおったんですね。

担任の先生、びつくりされて、これは絶対に家庭訪問をして、この子の気持ちをお父さんに伝えて、いろいろ先生とお父さんの間でトラブルが起こるかもしれないけれど、覚悟をして行こうと考えて行つて、お父さんに子どもの気持ちを率直に伝えた。一回ではなかなか分かってはくれなかつたけれど、結局子どもの気持ちを受入れてくれて、子どもに謝りをした。
—ああ、よかったですね。

難波 そんなことって、あるんですね。

—その子は、もしかしたら先生に助けを求めたのかもしれないですね。

難波 そうなんです。だから、信号を送ってきたんですね。こうして欲しいということ誰かに言ってくれる、つまり、ヘルプを求めるサインを先生が見つけ出してくだされば、子どもの中で救われる子がいっぱいいるだろうと思うんですね。
もう一つ、こんなのがあるんですが。小学校1年生の子が「こころのなか」という詩を書いてるんですよ。
せんせい こころの

なか みせてえ

ぼくのこころをみ

せてやるから

みせてくれなかった

ら

ぼくのこころもみ

せへんで

せんせいのこころと

ぼくのこころを

こころんして

かみにこころをか

て

こころんしよう

私はこれを読んでねえ、ギクツとしましたねえ。

—いま、朝、学校に向かっている車の中で、ギクツとされた先生方は、たくさんおいでになると思います。

CM

交通・気象情報等

—さて、今日のお客様様、子育て・教育なんでも相談ネットワーク代表世話人をおつとめの難波一夫さんですが、難波さんは、実は、結核で、療養をせざるをえないという時間がありました。最初はおいくつおの時ですか？

難波 学生時代に2年休学をしました。

—もう休学を余儀なくされ、療養をしながらはいけない、ということですか。

難波 はい、そうですね。それでまだ、ストレプトマイシンもパスも販売されてないという時期でしたから、もう、ひたすら

「おいしい物を食べて、寝ておりなさい」だったわけですから、ど、当時、食べるものというのは十分ありませんしねえ。昭和22・23年ごろですから、ほんとうに辛かったですねえ。

—行きたくても、学校に行けない。表に出ることができない。それも2年間…。

難波 しかも、当時は結核といったら、我が家の前を通る人たちが息を潜めて、あるいは息を止めて、走るようにして逃げて行かれます。そのような状況すら聞いておりましたのでねえ。

—すいぶんご心配もされたでしょうし、これから先どうなるんだ

という、2年間という時間は辛い時間でもあったと思うんですが、実は治りました。

難波 はい。

—そして、就職もしました。昨日のお話ですが、まあ「デモシカ先生」という、当時よく言われてもいたそうですね。先生になった。それが最初の一步だったんですけど、実は生物の先生になって、教壇に立つて、また、再発なされた。

難波 再発したんです。しかもそれは、先生になったことがとても楽しいことになりました。はじめることがあったんです。といいますのが、当時は県の予算も、その他の予算も少

なくて、自分たち学校の方で体育館をよくしたり、いろんな施設設備をよくしようということで、お金儲けをするようなことを子どもたちといっしょに考えましてね、夏休みに演劇部を連れて、地方を回るとですね。

—公演？

難波 公演をして。

—はあ。それで集まったお金で自分たちの学校をよくしようとして。

難波 はい。

—そんな活動に取り組んでるさなかです。

難波 はい。血を吐いて、再発ということに…。ここでもまた2年間休職を余

(6面につづく)

(5面のつづき)

儀なくされた。ですから、ほんとに学校に行きたくても行けない子どもの気持ちも、それから大人の気持ちも、もう分かりすぎるほどの「体験を」。

難波 そうなんです。ねえ。だから、不登校の気持ちというのが

ね、私は結核という病気を通じて不登校の子どもたちの気持ちが同じようにつながらなくてあるんですねえ。でも、いつも思いました。「三年寝太郎」というお芝居がありますねえ。「三年寝太郎」は三年寝て、いろいろな策略をめぐらして、そ

して、素敵な人生を自分で作り出しますね

え。「よし、わしは『三年寝太郎』でいこう」というのがひとつの方角でしたわね。

CM・ニュース等

—残りの時間、あとわずかなんですが難波先生、子どもたちの声をひとつ、ご披露ください。

難波 はい。もう時間が少なくなりましたので、最後に子どもたちの素敵なメッセージをお伝えしてみたいと思います。中学校の子どもが書いた作文です。「雪の朝」という題です。

僕の母は、父に別れてから女手ひとつで僕を育ててきた。いつも

疲れているよつだが、ほとんど愚痴も言わず、朝早くから洗濯などをし、夜も遅くまで働きながら、僕たちにも気を使ってくれる。それは、雪が降った朝だった。仕事に出かける道で母が滑って転び、腰を強く打って動けなくなつた。僕は驚いて抱き起こし、家の中に入れて、学校を休んで介抱をしようと思つた。すると母は、「大事なときだから休んではいけない。お前が休むなら、私は這つても会社へ行く」といった。だから心配でも学校へ出てきた。僕は勉強して、絶対に高校に合格し、「この母を喜ばしてやりたい。」

こう書いた子どもが、卒業文集に「わが母へ」というのを書いたんですね。

—ほう…。
難波 中学生が「わが母へ」というのを書くのは、だんだん減ってきてましてね。

—照れくさいし…。
難波 未来のことを書くのが多いんですが、この子は特別に「わが母へ」というのを書いたんです。

僕の母は、「人間は、外見よりも心が大事だ」とよく言う。僕もその意見にはまったく賛成だ。そうはいうものの、やはり外見が悪いよりも良いにこしたことはない。

ところで、僕の母



は、かなりひどい。人並みならまだすくわれろのだが、人並み以下とくる。それに、顔がスタイルかのどちらかが良ければよいのだが、両方悪いから困つたものだ。

けれど、いいところもたくさんある。家事はどつても上手で、その中でも料理は最高だ。それに、どつても優しい。ほかにもたくさんあるのだが、「ここには書ききれない。女手ひとつで僕を育てて

くれた、こういう母を僕は尊敬しているし、好きだ。厳しくされて「いやだなあ」と思ってたときもあつたけど、やっぱり長生きしてもらいたいとつくづく思う。卒業の最後に母への感謝の意をこめて一句。

わが母や ああわが母や
わが母や

— ああ、お時間がやっけてしまいましたが、なんだかお別れするのがもったいないのですが、難波一夫さん、またぜひスタジオにいらしてください。難波 ありがとうございます。— ありがとうございます。—

(おわり)

メール相談

相談は、電話（086-226-0110）や面接のほかに、メールでも受け付けています。

「相談ネットワーク 上之町ビル」で検索すると、ネットワークのホームページが開きます。

子育て・教育なんでも相談ネットワーク

〒700-0822 岡山市東町1-4-64 上之町ビル3F
TEL・FAX 086-226-0110
http://www5.ocn.ne.jp/~soudan/

育児に迷って、不安になっていませんか
子どもさんの不登校や引きこもりで悩んでいませんか
非行・同級生行動・進路問題等で相談するところを探していませんか
学校が学校でなくなってきたみたい...そんな思いをされた方はおられませんか

「子育て・教育なんでも相談ネットワーク」(略称 相談ネットワーク)は、個人会員 (約500人)と
いろいろな団体(岡山コープ・医療生協・高教組・市職労)など40団体の支援によって、1990年7月
発足した民間の相談機関です。
以下のような活動をしています。

相談・面談活動

曜日・・・月曜日～金曜日
時間・・・10:00～15:00
TEL・・・086-226-0110



メールでの相談もできます アドレス soudan-net@vivid.ocn.ne.jp

会誌

「相談ネットワーク通信」を発行しています。No.67まで発行しました。
なお、No.63までは冊子になっています。
ご覧になりたい方は電話、メール等でご連絡ください。

講演会・学習会

毎年、講演会か学習会をしています。
講師の先生は、大学の先生などそれぞれの専門分野で活躍されておられる方です。

「メールでの相談もできます アドレス soudan...」
をクリックすると、相談ネットワークのメールとリンク
していますので、ご利用ください。お待ちしております。

連休中に、娘夫婦が5歳の孫娘を連れて、帰省してきた。

孫娘は、なかなかママのそばから離れられなくて、ママもうつとうしがっているが、知的好奇心は旺盛だ。ひらがなとカタカナは読めて書けるほどになっているからか、

『いなか』ママの『は』漢字でどう書くの?』と自分の名前の漢字を聞いてくる。

妻が、『いなか』ママの『は』と孫娘が書いたひらがなの下に、

『いね』という字は難しいから、『た』を教えるね』と言いなから、『た』の下に、『田』の字を書いて、

『これが『いなか』ママのやん』の『た』という字だ

よ』と見せながら、もう一度、大きく

大きく

「縦書いて、かぎ書いて、真ん中縦に引いて、横書いて、横書いて、おしま

い」
と田の字を書いて見せた。

孫娘は、

「縦書いて、かぎ書いて、……真ん中縦に引いて、……横書いて、……」

と唱えながら、最後に、田の字の右肩に濁点を打って、

「できたあ」

みんな大笑いしながら、

漢字でどう書くの？

相談ネットワーク 石井信行

「上手に書けたねえ」

「点々はいらんのよ。」

『田』は、『た』とも読むし、『た』とも読むよ」

「『た』じゃあなくて、『だ』だから、点々なんじやな」

「すぐに覚えて書けるんじゃないよ。すぐえが」

と、口々に感心したり、褒めたり、注意したりした。

「教えて」と言って教えてもらったことを、すぐに形にして、出来たことを褒めてもらい、また次のことを知ろうとする、こうやって少しずつ賢くなっていくんだなあと思心しつつ、今度は、ひまわり学級でもこの手で行こうと思つたひと時だった。

(いしいのぶゆき)

か 光バスの大事故でまた多くの死傷者がでた。

た。

き よう争に負ければ小さな会社はつぶれる。そのためムリと違法を重ねて生き残りをほかる。

つ まりはふるい(競争と自己責任)にかけて弱小企業をつぶす。

ほ スだけではない。学校もふるい(差別と選別)にかけられ、つぶされる。

た まらないのは子どもたち。

学校を強制と排除、そして競争の広場にして

はいけな

い。(N)

